

## 神戸市シルバーカレッジ 講義概要(シラバス)

コース 専 攻	国際交流・協力コース	対象学年	2年
講義日	令和 8 年 7 月 16 日(木)		
テーマ	国際政治における国際組織の役割		
講 師	神戸大学大学院法学研究科教授 松村尚子		
<p><b>講義内容</b></p> <p>国際社会には国際連合をはじめ、多くの国際組織が存在します。これらはなぜ設立され、どのような役割を果たしてきたのでしょうか。本講義では、国際政治学における最新の研究成果を踏まえつつ、国際組織の成立と発展を歴史的経緯から振り返ります。さらに、主要な国際組織（国際連合、国際刑事裁判所など）を取り上げ、その役割や日本との関わりについて考察します。あわせて、国際組織に対して、人々がどのような認識や態度を持っているのかについても、最近の世論調査をもとに検討します。</p> <p>おおむね次のような論点を取り上げる予定です。</p> <p>午前中：</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 国際組織の誕生(いつ・なぜ設立されたのか)</li> <li>2. 国際組織の分布(世界のどこに・どの程度存在するのか)</li> <li>3. 国際組織における日本と中国</li> </ol> <p>午後：</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 国際連合に対する人々の信頼や認知</li> <li>2. 国際刑事裁判所に対するアメリカ人と日本人の態度</li> <li>3. 本日のまとめ</li> </ol> <p>※内容は、多少変更される可能性があります。</p>			
<p><b>講師からのメッセージ</b></p> <p>国際組織は日常生活ではあまり馴染みがないかもしれませんが、国際政治において重要な役割を担っています。この機会に理解を深めていただき、研究の一端を知っていただくとともに、日々のニュースを読み解く一助となれば幸いです。</p>			

## 神戸市シルバーカレッジ 講義概要(シラバス)

コース 専 攻	国際交流・協力コース	対象学年	2 年
講義日	令和 8 年 6 月 30 日(火)		
テーマ	ブラジル社会と政治経済		
講 師	浜口伸明(神戸大学経済経営研究所・教授)		
講義内容			
<p>1.       ブラジルとはどんな国か</p> <p>広大な国土と地域・民族・文化の多様性を紹介します。是非行ってみたい美しい景観、ダイナミックな自然、親日的な人々について勉強しましょう。また、主に神戸が送出国となって、戦前戦後を通じて25万人が日本から移住し、現在190万人とされる外国では最大の日系人社会を有するブラジルは「遠くの親戚」でもあります。ブラジルと日本、神戸の関係についても考えてみましょう。</p> <p>2.       ブラジルの社会と政治経済</p> <p>豊かな天然資源に支えられた多民族社会ブラジルと、同質的な労働力で経済発展を成し遂げてきた日本は対極にあると言えるかもしれません。農業、金属資源、エネルギー資源などでブラジルが持っている高い経済的ポテンシャルとともに、多様であるがゆえに生じる格差社会の現実の苦悩をひも解きます。アマゾンの森林破壊が教える経済開発と環境保全の対立についても考えてみましょう。</p>			
講師からのメッセージ			
ブラジルは日本から30時間もかかるので気軽に訪れることは難しいですが、神戸と縁の深い所でもありますので、この講義を通じて少しでも身近に感じていただければ幸いです。			

## 神戸市シルバーカレッジ 講義概要(シラバス)

コース 専 攻	国際交流・協力コース	対象学年	2 年
講義日	令和 8 年 6 月 26 日( 水 )		
テーマ	ミャンマー難民との共生を考える—ドキュメンタリー映画「OUR LIFE」制作の背景を通して		
講 師	国際ファッション専門職大学／京都大学東南アジア研究研究所 直井 里予		
<p>講義内容</p> <p>ねらい:本講義では、講師本人が制作した難民に関するドキュメンタリー映画の参考上映とディスカッションを通し、国際協力や難民の支援活動について理解を深めます。</p> <p>内容:</p> <p>① 国際問題の根源的要因を深く考察する。(ミャンマーの少数民族問題を事例に、紛争の歴史的背景を理解する)</p> <p>② 難民キャンプにおける国際 NGO(ボランティア)の役割を理解する。</p> <p>東南アジアは、多様な民族、宗教、文化で構成されています。その多様性を共存させつつ、民族や宗教の抗争や貧困など、多くの問題も抱えています。このような多様性の中で、人々はどうのように社会で関係性を形成し、維持しているのでしょうか。また、人々の日々の生活を支える地域の諸問題を解決するには、どうすればよいのでしょうか。</p> <p>本講義では、タイ・ミャンマー国境に位置する難民キャンプで生まれ育ったミャンマー難民の少年とその家族の生きざまと心の軌跡を 10 年間に渡り描いたドキュメンタリー映画『夢の終わり—OUR LIFE 2』を通して、ミャンマー難民は、難民キャンプの変化とどのように関わりながら生き、第三国定住地でどのような社会関係を形成しているのか、また、国際 NGO 団体の活動内容を紹介しながら、難民キャンプにおける NGO の役割に関して考察します。</p> <p>さらに、2021年 2 月1日のミャンマーで発生した軍によるクーデターが、難民の帰還にどのような影響を与えたのかを考察しながら、ミャンマーの現状を難民問題の視点から議論します。</p>			
講師からのメッセージ			
<p>映画の上映の後は、各グループにわかれて、ディスカッションと発表を行います。日本における難民の受け入れ政策や難民支援の在り様など、皆さんと一緒に考えていければと思います。</p>			

## 神戸市シルバーカレッジ 講義概要(シラバス)

コース 専 攻	国際交流・協力コース	対象学年	2 年
講義日	令和 8 年 6 月 12 日( 金 )		
テーマ	「イスラームの心と中東の諸紛争」及び「サウディアラビアの大変革」		
講 師	中村 覚		
講義内容			
1. ねらい			
<p>前半では、イスラーム教徒(ムスリム)との交流にあたって大切となる視点について、一次資料をもとに考えていきます。後半では、2026 年に起きたイスラエルと米国によるイラン攻撃を手がかりに、これに対するサウディアラビアの見方を取り上げます。現在のサルマーン国王治世下における、脱石油経済の構築やイスラーム改革、対米外交や中東戦略の変化を解説しながら、その背景を説明します。</p>			
2. 主な内容			
午前「イスラームの心」			
世界、特にアジアで増加するイスラーム教徒			
イスラーム教の教えには「心」と呼べるものがあるのか			
イスラーム教は女性をどのように位置づけているのか			
ジハード(努力・献身)は、戦いをどのように捉えているのか			
午後「サウディアラビアの大変革」			
厳格なイスラーム解釈(ワッハーブ主義)と石油依存経済の体制から、文化の開放・女性の社会進出・脱石油経済の構築への改革路線			
積極的な中東地域政策と対テロ戦争への転換			
米国民党政権・共和党政権への臨機応変な対応			
限定的外交から、グローバル外交・アジア外交への展開			
イスラエルと米国によるイラン攻撃(2026 年)に対するサウディアラビアの見方			
講師からのメッセージ			
<p>神戸をはじめ、日本各地ではイスラーム教徒(ムスリム)との交流が広がっていますが、戦争やテロ事件の印象から、イスラーム教については今も誤解が少なくありません。日本を訪れるムスリムの多くは、大学教員や留学生、ビジネス分野で活躍する専門職の方々です。また、政府や関西の経済界は、ムスリム・インバウンドの受け入れを進めてきました。本講では、ムスリムへの理解を深める視点と、戦争やテロの原因について分かりやすくお話しします。</p>			

## 神戸市シルバーカレッジ 講義概要(シラバス)

コース 専攻	国際交流・協力コース	対象学年	2年
講義日	令和8年6月5日(金)		
テーマ	国際関係の歴史		
講師	同志社大学政策学部教授・神戸大学法学部名誉教授 月村太郎		
<p>講義内容</p> <p>新型コロナウイルスのパンデミックやロシアによるウクライナ侵攻、米国によるイラン空爆など、最近の国際関係は急激に変化しているように感じられるかもしれない。しかし新型コロナと中世のペストや第一次世界大戦に伴うインフルエンザの流行、米ソの動きとふたつの世界大戦とを比較するならば、我々を取り巻く国際関係の急変も相対化できる筈である。特に、ウクライナ侵攻に際してのプーチンの言動、そして当事者であるウクライナ抜きでの停戦の動きは、1938年のチェコスロヴァキア危機におけるヒトラーの言動、当事者抜きで英仏独伊による解決を図ったミュンヘン会議を彷彿とさせるのである。身近な個人的経験を絶対化せずに相対化することは、我々に最も必要とされる姿勢のひとつである。その為にも歴史に学んでいきたい。</p> <p>本講義においては、こうした現在の政治的事件の相対化を試みた後、19世紀以降、最も大きな変動を経験した地域である「バルカン」を事例に、近代以降の我々がどのような歴史を刻んできたかを紹介する。「バルカン」は、ロシアが進出を試みてきた地域であり、それが第一次世界大戦までの最大の国際問題である「東方問題」の背景にある。ロシアが西方に進出する動きはウクライナ侵攻にも共通することであり、「東方問題」は現在も重大な事案として存在し続けているのである。</p> <p>こうした歴史を学ぶことで、ユーラシアの東端に位置する島国に住んでいるいまの我々を相対化することを試みて欲しい。</p>			
<p>講師からのメッセージ</p> <p>講義において浮かんだ疑問や感想はそのままにせず、講義の終わりに設ける時間帯に講師にぶつけて下さい。</p>			

## 神戸市シルバーカレッジ 講義概要(シラバス)

コース 専 攻	国際交流・協力コース	対象学年	2年
講義日	令和 8 年6月 4 日(木)		
テーマ	国際関係の現在		
講 師	同志社大学政策学部教授・神戸大学法学部名誉教授 月村太郎		
<p>講義内容</p> <p>冷戦終了以降の国際関係の傾向は、グローバル化として纏めることができると思われてきた。グローバル化の特徴に関する定義は論者によって多様であるが、少なくとも越境する「ヒト・モノ・カネ・チエ」の増大については、殆どの論者が特徴としている。その最たる例が、新型コロナウイルスのパンデミックであった。そうした定義に則るならば、近代以降の歴史は常にグローバル化が底流にあったとすることもできるのである。しかし最近では、グローバル化(の行き過ぎ)に対する反作用として、政治的主権に有する主権国家による「反撃」が目立ってきた。その端的な例が、プーチン露大統領が 2022 年 2 月に始めたウクライナへの侵攻であり、トランプ米大統領第二期政権が仕掛けた関税ディールであった。更にトランプ米大統領は、2026 年 1 月にヴェネズエラに侵攻して大統領を拘束し、2 月にはイランを空爆して最高指導者を殺害した。これらの動きは、第二次世界大戦後に自分たちが中心となって構築してきた国家間の国際秩序を破壊する行為でもあった。同様な動きは、ソ連によるハンガリー侵攻(1956 年)、チェコスロヴァキア侵攻(1968 年)、アフガニスタン侵攻(1979 年)、米国によるグレナダ侵攻(1983 年)、パナマ侵攻(1989 年)など、冷戦時代にも起きてきたが、いずれも冷戦構造における自己の勢力圏の防衛が主たる目的であった。昨今の軍事侵攻は、必ずしもそうした文脈では説明できず、グローバル化を前提にしないと説明できない。</p> <p style="text-align: center;">グローバル化をめぐる国際的な現象について、皆さんと一緒に考えてみたい。</p>			
<p>講師からのメッセージ</p> <p>講義において浮かんだ疑問や感想はそのままにせず、講義の終わりに設ける時間帯に講師にぶつけて下さい。</p>			

## 神戸市シルバーカレッジ 講義概要(シラバス)

コース 専 攻	国際交流・協力コース	対象学年	2 年
講義日	令和 8 年 5 月 15 日( 金 )		
テーマ	中国の社会経済		
講 師	梶谷 懐(神戸大学教授)		
講義内容			
<p>中国経済は不動産バブルの終焉と消費の落ち込みで経済が低迷する一方、EV、太陽光パネル、リチウムイオン電池などの新興産業はその輸出攻勢でグローバル市場を席卷しているというアンバランスな状況にあります。さらには、第2期トランプ政権における米国の保護主義的な政策が、中国経済の不確実性を一層高めています。本講義では、中国経済を語る際に不可欠な政治・社会的な前提知識について簡単に解説した後、不動産不況を背景とした消費需要不足と生産能力過剰を抱える中国経済の現状と今後の見通しについてお話しします。</p>			
講師からのメッセージ			
<p>参考文献として、梶谷懐・高口康太『ピークアウトする中国:「殺到する経済」と「合理的バブル」の限界』文春新書、2025 年、を挙げておきます。</p>			